



きょうだいルームをご存じですか



目的

ご家族が安心して面会ができるように、入院しているお子さんのごきょうだいを預かるお部屋です

時間

13:30～15:00 か 15:15～16:45 のどちらか

場所

ポートアイランドセンタースクエア（病院北側の建物）2階

対象

生後3か月～小学校3年生



保育士さんが
いっぱい
遊んでくれるよ♪

詳しい利用方法は看護師や保育士にお尋ねください。
また、ホームページにも掲載していますのでご覧ください。



Concept コンセプト

●**基本理念** 周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。

- 基本方針**
1. 患者の権利を尊重した医療の実践
 2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
 3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
 4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
 5. 親とこどもが一体となった治療の推進
 6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
 7. 医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
 8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化



編集後記

今年も猛暑の日が続いた夏休みも終わり、空の高さや虫の声に秋の気配を感じるようになってきました。げんきカエル10月号が皆様のお手元にある頃には、秋もすっかり深まっているのではないのでしょうか。

さて10月号では「クールな熱傷のお話」として救急科の林Drのお話を掲載しております。今後も身近で日常に役立つ話題を連載していく予定ですので、次回号からもお手に取って頂けたらと思います。(S.A)

委員 長： 貝藤裕史
副委員 長： 大津雅秀
委員： 深江登志子
西美奈子
細見能文
栗田香奈子
寺田朝子
中村直子
時克志
北浦泰
東川果央

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで



兵庫県立こども病院
HYOGO PREFECTURAL
KOBE
CHILDREN'S
HOSPITAL

〒650-0047
神戸市中央区港島南町1丁目6-7
TEL.078-945-7300
FAX.078-302-1023
https://www.hyogo-kodomo-hosp.com/
e-mail:info_kch@hp.pref.hyogo.jp

04病P2-006A4

げんきカエル

No.79

兵庫県立こども病院
ニュースレター



令和4年(2022) 10月1日

新任アレルギー科長のご紹介

アレルギー科 濱田佳奈

2022年9月1日付でアレルギー科科長を拝命いたしました濱田佳奈です。前任の田中裕也先生より当職を引き継ぎ、身の引き締まる思いであります。

アレルギー疾患は身近な疾患であり、今や国民の2人に1人が何らかのアレルギー疾患を持っているともいわれています。代表的なアレルギー疾患として食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、薬剤アレルギーなどがあります。アレルギー疾患は、長く付き合っていく病気が多いですので、現在表面化している症状を抑えるとともに、症状が治まった後に再燃/再発を減らすよう上手に付き合っていく方法を考えることも重要です。さらに、いくつものアレルギー疾患をお持ちになる患者さんもおられるので、トータルケアとして考えていく必要があります。当院では医師、小児アレルギーエドゥケーターを含めた看護師、薬剤師、管理栄養士など多職種のスタッフにて患者さん、および保護者の方にとってよりよい治療およびサポートができるよう努めていきたいと思っております。

また、当院では様々な背景があり、かつアレルギーにもお困りの患者さんも多くおられます。そのような患者さんに対しては、各診療科の先生方と協力しながら、そのお子さんに最適な治療を提供していきたいと考えております。

アレルギー疾患は以前抗原回避、除去などアレルギーの原因から避けるようお伝えしてきましたが、ここ10-20年で免疫療法、すなわち治療としてアレ

ルゲンに接触させ免疫寛容を誘導する治療が注目されるようになってきました。特にダニアレルギー、花粉症などに対して皮下/舌下免疫療法が有効とされています。また、難治性の喘息、アトピー性皮膚炎、じんましんなどには生物学的製剤が新しい治療として出てきており、今までの治療ではコントロールに難渋していた方に対して治療の選択肢が増えました。

さらに、当院はアレルギー疾患に対応する兵庫県の拠点病院としての役割も担っております。アレルギーの相談事業や専門の医療従事者の育成などの活動にも取り組んでおります。

今後も、前任の先生方の築かれたアレルギー診療を継続しつつ、かつ兵庫県の小児アレルギー診療の中核としての機能を果たせるよう精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



病気とは長い付き合い

梅村 早

「緑内障なの？若いのに目薬や定期通院があつて大変でしょ。」

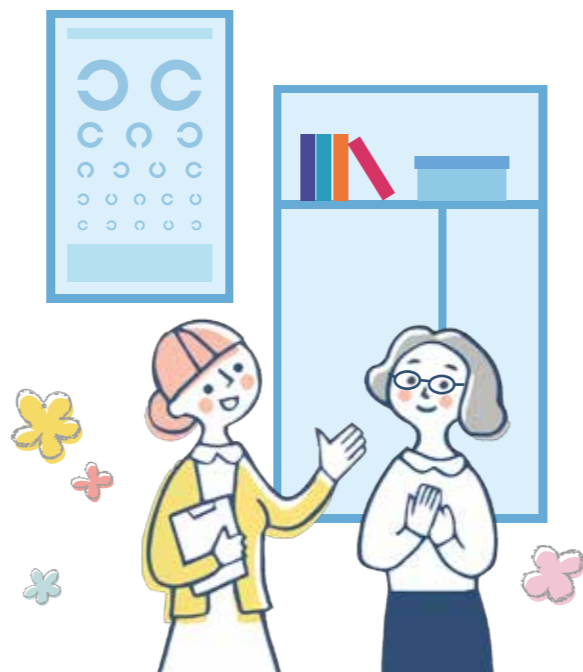
こんな言葉をかけられたのは小学生の頃でした。私は先天性緑内障のため、生まれてすぐにこども病院へ入院して眼圧を下げる手術を受けました。その後も高校卒業まで定期通院と2度の入院・手術でお世話になりました。通院の頻度は時期によって異なりますが、およそ月に1度のペースでした。

そんな中で知り合いからかけられた言葉でした。緑内障は加齢による病気と捉えられることも多く、小学生の私の話を聞いて知り合いは驚いたのかもしれない。でも、私にとって目薬の管理や定期通院は日常のことで大変なこととは思っていませんでしたし、当時の私にとってこども病院への通院は楽しみなものでした。病院では多くのスタッフさんに声をかけていただきました。雛飾りやクリスマスなどの飾りなど、こども病院でしか味わえない季節の変化が好きでした。時々、待合室で同じ年くらいの子供さんと仲良くなることもあり、普段の生活にはない楽しみがたくさんありました。

また今振り返ると、こども病院で服薬管理の仕方や緑内障について教えていただいたことが今の生活習慣・健康管理の基礎になっていると感じます。緑内障とは一生の付き合いが必要です。持病があることで生活に不便を感じることもあります。私の場合は視力が0.1程度と弱いため、読み書きや初めての場所へ

の外出には注意・工夫が必要です。また、仕事が忙しくなるとストレスが溜まるのか、眼圧が高くなり体調管理が難しくなることもあります。持病についてどのように受け止めていくのかも正解がなく、今も模索中です。

私は今年の11月に30歳になります。昨年までは学校の教員として仕事をし、多くを学んだ20代でした。今はその経験を活かして更なる目標に向けて勉強中です。30代も多くのことに挑戦して知識と経験を積み、再び教員として多くの方と関わりたいと考えています。新しい挑戦をするためには体調管理が欠かせません。通院や服薬が必要で体調管理には難しさもありますが、今の健康と多くの方に支えていただいていることに感謝しながら、様々なことに挑戦して自分を豊かにしていきたいです。



クールな熱傷のお話

救急科 林 卓郎

- 熱傷は予防可能な場合が多い!! 傾向と対策を。
- 水道水で洗うか確認を! 深さは時間と共に変化することもあることも重要!!
- 冷たすぎない水で15分程度流しましょう。乳幼児は低体温にも注意して!



まだ夏の余韻が濃く、やけどの話をして身近には感じられないかも知れません。ですが、小児特に乳幼児では季節に関係なく起こる傷害がやけど=熱傷です。今回は是非ともこの熱傷について皆さんに知って頂きたく、取り上げることにしました。小児の熱傷は特に乳幼児で多く、ほとんどの場合予防できる可能性があると言われています。ここでは火災による熱傷ではなく、日常生活で頻度の高い熱傷について紹介したいと思います。具体的には、ダイニングテーブルに置いていた湯(ポット)や味噌汁、麺類のスープをこども自身がこぼして受傷する、アイロン・ヘアアイロンなど電熱器具を触り受傷する、ことが多いようです。こどもの発達段階や年齢相応の行動特性と密接に関連しています。(日本小児科学会ホームページのinjury alertや消費者庁ホームページでやけど事故として具体例や典型例が掲載されています。)

熱傷は皮膚、その他の組織(皮下組織・脂肪など)が損傷を受けます。重症度は熱傷の深さと範囲(面積)で通常評価します。深さは、一般的にⅠ～Ⅲ度に分類します。Ⅰ度は日焼けした際、もしくは熱いものを触った後に赤くなる状態です。Ⅱ度は真皮に達する熱傷で水疱(=水ぶくれ)ができます。Ⅱ度の熱傷は浅い場合と深い場合に分けて考えます。Ⅱ度の中でも深いもの、及び皮下組織に至るⅢ度の熱傷では逆に痛みを感じる神経も損傷され、却って痛みが弱くなります。熱傷深度が時間と共に進行することもありますので留意が必要です。面積は体表に対する割合で評価します。こども本人の手の大きさを目安に熱傷の面積を計算します(手の大きさは体表面積のおおよそ1%)。

熱傷で実は最も危険性が高いのは気道熱傷です。受傷した際に自宅で行うべきことは、特に液体による熱傷の場合こどもに呼吸苦が無い、口腔に熱傷が無いかの確認です。粘膜である気道に熱傷を負うと窒息することもありとても危険です。もし呼吸苦がある場合は救急車を要請してください。そのような状態でない場合は、まず落ち着いて受傷部を流水で流しましょう。水道水で十分に、逆に氷など低温で冷却すると凍傷のリスクもあります。冷たすぎない流水で15～20分間流しましょう。流した後は、乾燥でも痛みを感じますので、ワセリンなど塗布することも重要です。乳幼児で躯幹の熱傷の場合、広範囲の冷却により低体温になる可能性もありますので、特に冬場は水温をあまり低くしないように気を付けましょう。

病院受診の目安は、眼や口の中など顔面に熱傷を受傷した、水疱ができた(Ⅱ度以上の深い熱傷)、アルカリなど化学熱傷、痛みが強い場合です。もちろん、判断に迷う際には#8000や#7119などの電話相談を利用しても良いと思います。

熱傷の治療は基本的に湿潤療法に準じた、乾燥を避けることが主です。ワセリンなどの塗布で保湿を行います。加えて痛みが強い場合は、鎮痛薬を積極的に使用しましょう。

私達、救急外来のチームも事故の予防に力を入れながら、こども達の痛みと不安を少しでも和らげることができるよう、日々努力しております。皆さんの大事なお子さんのためにも、ぜひ予防についても今一度お考え頂ければと思います。

年齢	当該年齢児の特性	熱傷の予防
乳児	なんでも掴もうとする なんでも口に入れようとする	テーブルの上に熱いものを置いたままにしない 蛇口から出る湯の温度は50度を超えないよう設定する 熱いものを持ったままこどもを抱く・おぶうもしくは膝の上に座らせることはしない 熱いものを持ったままこどもの近くを通らない
幼児	熱いもの(蒸気や電子機器)を触ると熱傷を負うことを理解できていない	調理中手が離せない場合はキッチンにこどもを入れない カップや熱い食べ物を触ろうとするため、こどもの手が届くところに置かない 体を支えるために手を使うことが多く、このような位置に熱傷を負うような物は置かない
学童(小学低学年)	危険のある程度の認知は可能 好奇心が危険認知に勝ることが多い	こどもにマッチやライターで遊ばないように指導し、手の届かないところに保管する